堀 俊造

医学部を夢見たクリスチャン・ドクター

本井 康博
（大学神学部教授）

●同志社の医学教育

医学部まで、あと一歩であった。同志社病院と京都看病婦学校までは、順調であった。が、本丸は幻想に終わった。実現すれば、帝大（東京大学）のドイツ医学に対して、特異な欧米医学の導入が、図られたはずである。

それから一世紀を経た2008年、同志社大学に生命医科学部が誕生した。文科省による医学部設置解禁を受けて、次は医学部「復興」の夢が、キャンパスを駆け巡るのか。そう言えば、新島襄宿志の大学は、文（神）、法、医で出発するはずであった。鼎の一足は、今も欠如したままである。

19世紀の古都を慌ただしく駆け抜けたキリスト教系病院・看護学校は、今ではまったく影が薄い。かろうじて名前が残るスタッフは、J・C・ベリー、L・リチャーズ、佐伯理一郎くらいである。『同志社山脈――113人のプロフィール』（晃洋書房、2003年）に彼らを載録したのが、風化防止になっているのか。

医師は、もちろん佐伯だけではない。開院当初からベリー院長を助け、そして病院の終焉を見届けたのが、堀俊造（俊三）である。彼の事績は、出身地の岡山県落合町（現真庭市）で辛うじて知られるにすぎない。それも、尾崎蘭香『落合町史』（263～264頁、落合町教育委員会、1964年）や『落合町史』通史編（914～915頁、落合町、2004年）が、触れる程度である。

●堀俊造の同志社デビュー

近年、落合町ゆかりの外科医（元落合病院医師・落合教会役員）、山代寛（ひろし）教授（沖縄大学人文学部福祉文化学科）が、堀を再発掘された。「タバコのHistorical Accidentに関わったキリスト者医師『堀俊造』について」（『日本禁煙学会雑誌』第二巻第7号、2007年10月）、ならびに、「禁煙活動と落合教会――落合教会創設者・堀俊造について」（『医学と福音』第59巻第9号、2007年10月）である。

同志社病院と京都看病婦学校（現・KBS京都の所。同志社社史資料センター蔵）

同志社との関係は、依然として不透明のままである。そこへ、「お宝」の出現である。今年2月、京都市在住の村井正三氏が、永年、保存されていた祖父の写真や書類など数十点を提供された。眼を見張るのが、『照引　新約聖書』（米国聖書会社、日本横浜印行、1884年）である。村井氏は、洛北の日本キリスト教団京北（きょうほく）教会会員である。

資料の一部は、同教会の今井牧夫牧師（同志社大学大学院神学研究科に在籍して、博士論文を作成中）の斡旋で、今春、本学神学部に寄贈された。

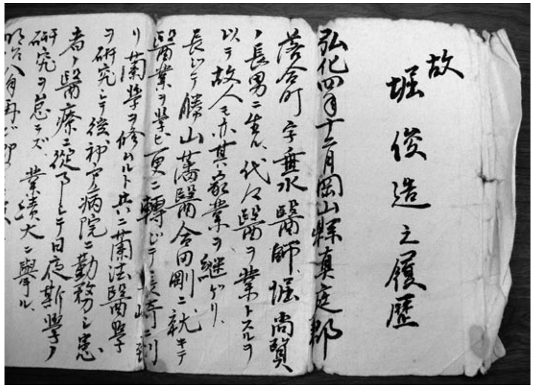
そのうち、履歴書全文を紹介する。原文は今井氏の読み（一部加筆）に依るが、元々は、毛筆縦書きの漢字・カタカナ表記である。旧漢字は新漢字に変え、句読点を加えた。改行も適宜行なった。〔　〕は本井による注記である。

包み紙の裏面には、「堀惇一　所有」とある。書かれた日付と署名から判断して、これは堀俊造の葬儀で、次男（惇一）が朗読したものである。

●履歴書

故堀俊造之履歴

「弘化四（一八四七）年十二月、岡山県真庭郡落合町字垂水、医師、堀尚賢の長男に生る。代々医を業とするを以て、

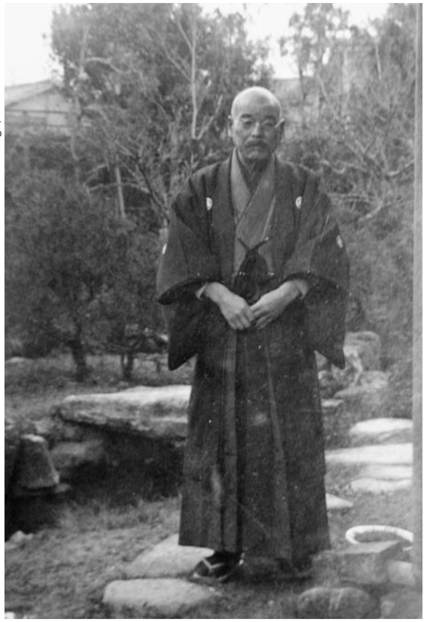

故堀俊造之履歴

故人履歴書

故人も亦、其家業を継げり。長じて勝山藩医、合田剛に就きて医業を学び、更に転じて長崎に到り、蘭学を修むると共に、蘭法医学を研究して、後、神戸病院に勤務し、患者の医療に従事して、日夜、斯学の研究を怠らず、業績、大に挙る。

明治八（一八七五）年、再び郷里落合町に帰りて、自宅開業を為す。当時の医師は、何れも皆、漢方医なりしを、独り故人は、洋医として修業したるを以て、患者は皆其門に集り、其診療を受けたり」。

これまで、不明であった医学修行の形跡が判明する。神戸病院に勤務、とあるが、従来は、神戸で修行と伝えられてきた。いずれにせよ、神戸は堀の人生を変えた。アメリカン・ボード宣教師のD・C・グリーンからキリスト教の感化を受けた。とくに、禁酒の教えである。自身、酒豪であったが、禁酒を断行したばかりか、帰省後、一族の大酒飲みに禁酒を勧めた。キリスト教の力を借りれば断酒ができる、と説き伏せて、ともに聖書研究を始めたという（尾崎蘭香『落合町史』263頁）。また医業に関しては、自宅開業の後、1879年2月には、岡山県から「公立病院雇医」を申付けられている。


堀俊造（洛北・下鴨の自宅で）

現在の美作落合教会（2011年5月）

●落合教会を設立

「明治十四（一八八一）年、基督教を信仰するに至り、当時、備中高梁の伝道師、二宮邦治郎（邦次郎）氏を聘して説教会を開き、同志相集りて、斯教の研究を積むに努めたり。之れ実に、落合教会の嚆矢とす。今日、同地方に於いて四教会の設立を見るに至れるは、実に先の落合教会の設立、其基礎を為せり。

同年十一月、旧三田藩士、河村正馬長女、良子と結婚（夫婦とも再婚）し、次来（爾来）、男子三人、女子六人の多数子女を挙ぐるに至れり。

其後、基督教牧師、渡邊源太、上代知新氏を聘して、熱心に其布教に尽す所あり。作洲（美作国）に基督教の種子を移入したるは、専ら故人の力に拠る所少からず」。

洗礼を受けたのは、1882年、高梁教会であった。以後、自宅を開放して、伝道集会を開く。

これが、落合教会の始まりである。先輩格の岡山や高梁、笠岡、天城に次いで、県下五番目のプロテスタント教会（いずれも同志社系の会衆派）である。県北部（美作地方）では、もちろん第1号である。

堀と新島襄の出会いも、この前後か。新島旧蔵の「辱知姓名簿」は、1883年からの使用であるが、一頁目の4番手に、上代知新と並べて堀（堀俊三とある）の名が記されている。この年11月に新島は高梁教会に出張しているので、あるいは同地で上代牧師から紹介されたのであろうか。

「故人は、此の宗教的教化に力を尽くせし外、女子教育の為めには、高梁順正女学校より河合久子女史を聘して、自個所有の別宅に於いて裁縫学校を新設し、続いて相愛女学校を創設し、更に勝山町に共愛女学校を設立する等、郷土婦女子の為めに教化を助くること、甚大なると共に、青年男子の為めには夜学を設け、大いに向学の風を養成奨励し、地方風教に資すること、少なからず」。

地元での教育、とくに女子教育に対する堀の貢献は、従来、知られていなかった。

●同志社病院

「明治二十（1887）年、京都同志社病院長、ベレー（ベリー）氏の招聘に応じ、〔母の豊を始め〕一家を挙げて此地に移住し、ベレー氏の許にありて、新進医学を研究し、専ら同氏の片腕として同病院の名声を挙ぐること、少なからず。又、同志社病院勤務の傍ら、同校に於いて生理学、衛生学の講師を嘱託せられ、尚、校医として、医術および教育の任に従事せり」。

ベリーは、アメリカン・ボードの医療宣教師で、岡山での活動が長かった。彼の紹介で岡山から同志社に転じた堀は、病院だけでなく、学園にもタッチしていることが、判明する。

一度（1889年に）、同志社スタッフ辞職の話が持ち上がったことがある。夏に同郷の伝道師（同志社神学校卒）、馬場種太郎が、衰微した落合教会のためには、「友人堀」の帰省が最善、と新島襄に申し入れた（『新島襄全集』九下、1031頁）。堀は、落合、京都双方にとって不可欠な人材であった。

1890年には、病院の近く（上京区室町上長者町）に土地・建物を購入して、そこに住んだ。その後、河原町今出川や上京区小山堀池町で開業。最後は下鴨松木町に落ち着いた。

「明治二四（1891）年、岐阜県美濃大垣の震災に際しては、其惨害を耳にするや、率先して医術器械を携え、災害地に到り、多数の傷害患者の為めに尽力し、後日、同県知事より表彰せられたり」。

濃尾地震の際、ベリーは、同志社の学生を引率して、現地で治療活動を展開した。無料奉仕、あるいはボランティア活動の先駆である。堀も同行した。

堀俊造の書「以弱勝強」

●村井兄弟商会

「之より先き、村井吉兵衛氏は、村井兄弟商会を設立して、煙草製造工場を起すや、ベレー氏を介して、〔堀は〕外国煙草の輸入を村井氏の為め尽力し、同時に同工場顧問医を兼務したるを以て、故人は幾多無職の青年を、続々、右煙草会社に入社せしめ、一方、彼等の向上心を誘発して、宗教的に善導し、為めに郷里青年にして、故人より直接、間接の援助を受けて、今日相当の地位を得、活社会に立ちて成功したる者、十指に余れり。以て故人が、教化方面に貢献せし所、少なからざるを知るに足らん」。

　堀俊造の孫、村井正三氏は吉兵衛とは血縁上のつながりはない。堀は、村井の会社に地元の青年たちの就職を斡旋したばかりか、村井家の養子縁組にも係わっている。守田家の息子を養子に斡旋した。彼の兄、守田幸吉郎は、のちに落合教会の牧師に就任する（尾崎蘭香『落合町史』264頁）。守田牧師と言えば、1896年に現在の落合教会堂を竣工させた功労者である。会堂新築のために吉兵衛は、多額の寄附をした、とこれまで伝えられてきた。守田牧師が、村井家に養子として入った弟を介して、吉兵衛から多額の建築資金を引き出すことは、大いにありえる。吉兵衛の寄附金は、堀とのパイプだけでなく、守田兄弟の存在を考慮すると、がぜん、蓋然性が高まる。

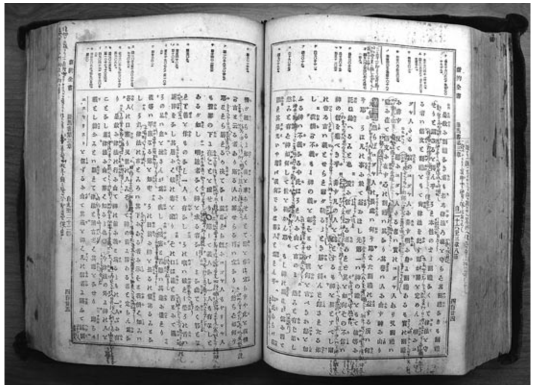
　一説には、新島も堀同様に、村井とは、彼が煙草産業に手を染める前から交遊があったという。同志社理事の実業家、中村栄助によると、土曜に同志社から新島を始め、教員や学生を呼んで、家庭集会を開いた時など、同じ町内の村井もよく聞きに来たという（「同志社と中村翁」、1933年、同志社大学人文科学研究所マイクロ・フィルム）。

　村井をベリーの同志社病院に紹介したのも、中村である。入院中の村井に、ベリーが煙草の害を説いた本を3、4冊、貸したところ、英書が読めないので、堀に「誰か読んでくれる人を紹介してほしい」と依頼したという（同前）。あるいは、「煙草王」になれたのは新島のおかげ、と終生、村井は感謝していた、との伝説さえある。こうした同志社人脈を介して、

村井は堀に自分の会社の「顧問医」への就任を要請したのであろう。

●晩年の信仰

「更に故人は、終始一貫、勤倹を守り、自ら持すること甚だ薄くして、以て多数子女に、各々相当の教育を施し、親として、其子女を養育するの義務を完ふしたる点に於いても、亦、故人の家庭の人と為りを察するに足る可し。



朱の書き入れのある堀の愛蔵聖書

かくの如く、故人の基督教に対する信仰は、終始渝らず、頽齢に及んでは、日夜聖書を手にして、自ら修養を積むを以て、唯一の楽みとせり。然も一昨冬以来、健康勝れざりし故人は、漸次、体力の衰頽を来したるも、未だ嘗て、日曜の教会礼拝を怠らず、時として教会の往復の途中、卒倒したること数度に及びたるも、尚之を不止」。

　残された堀の『照引　新約聖書』には、赤ペンで細字の書き入れが、多数見られる。たとえば、表紙の余白には、「教会に二種ノ人民アリ。一ハ、宗教家ニテ、正義ヲ行ハント欲シ、神ヲ愛セント務メル者也。一ハ、真正ノ信者ニテ、神ヲ愛スルノ心ヨリ、義務ヲ尽スニ熱心ナル者ナリ」とある。

●臨終

「遂に病床の人となるに及んで、已むなく聖書を繙くに留め、信仰、愈々厚きを加へたるも、体力漸を追ひて衰頽を来し、昨年九月以来、著しく食餌の減退を見るに至り、十一月中旬に至りては、自ら其立たざるを覚悟したるが如きも、家人に対しては、其憂慮をおそれて、努めて其然らざる風を装ひ、偶々、身体苦痛を感ずる事あるも、家人に対しては、自ら忍んで之を公言することなく、十二月中旬、愈々其死期の迫りしを覚るや、其子女全部を病床に招き寄せ、徐々に永久の別れを告げ、十二月廿日午後六時廿五分、眠るが如く安らかに、永遠に上天の人となれり。

　大正十五〔一九二六〕年一月二日」。

　以上が、葬儀で読まれた故人履歴、ならびに本井による注記である。それにしても、信仰の篤さは、半端ではない。

　履歴書では、肝心の同志社病院における堀の働きは、なお不透明である。

　同志社病院の記録は、どうか。1892年3月の第六年報によれば、外来部門に堀の名が出る（『同志社百年史』資料編一、213頁、同志社、1979年）。『同志社百年史』の通史編にある「京都看病婦学校と同志社病院」（長門谷洋治執筆）の章では、初期看病婦学校の日本人スタッフに関して、「川勝原三は、東京大学卒の若い医師であった。他に病院助手と

して堀俊造がおり（〔看病婦〕）学校には関係なし）、のちミシガン大学卒の白藤（児玉）信嘉も教師として加わった」とあるばかりである（通史編一、300頁）。

●ホーム・ドクター

児玉は、新島家のホーム・ドクターでもあった。母親への往診を要請する手紙が二通、『新島襄全集』（四、372〜373頁）に収録されている。

逆に堀からも、発音に障がいを持つ落合のある少女を、盲唖院（現京都府立盲学校）へ入れてほしい、との依頼状（1883年6月）が新島の許に来ている（同前五、182頁）。

児玉は、同志社の授業も受け持った。女学校の上級生を男子校の授業に呼んで、「生理学」を講義した（『創設期の同志社』194頁、同志社社史資料室、1986年）。

●人情家

堀は人情家で、同志社の学生を可愛がった。いっしょに濃尾震災の救済に出掛けた学生に古谷久綱がいる。彼が、病人の友人に同行して同志社病院に行った時のことである。健康そのものの古谷が、「今度は僕を診て下さい」と頼むので、堀は「君はどこが悪いのか」と尋ねた。

古谷は、「ボートレースが迫っているのに、寮の食事が不味くて仕方がない。この際、入院して静養方々、旨い食事にありつきたい」と答えた。堀は一驚した。「処が堀氏は御人好し」であった。「善し、善し、それはよからう。入院して二人分位、喰ひ玉へ」と、入院させてくれた。

その日の夕食には、「シッカリ丈夫になって、是非、大勝利を占め給へ」と「西洋料理の大した御馳走」が出た、という。満腹したふたりは、これで体調も回復した、とばかり、入院を取りやめ、意気揚々と寮に戻った（『創設期の同志社』175頁）。

●同志社病院の閉鎖をめぐって

堀は、同志社病院閉鎖の際は、病院側の窓口であった。1896年12月に、同志社病院が京都府知事から受取った表彰状の宛名は、「同志社病院代表者　堀俊造」である。

堀は病院の代表者として、いわば、幕引き役を負わされた。1896年6月、同志社社長（総長）の小崎弘道は、堀宛ての公文書で、病院と看護学校の「継続」を約束する。が、8月の同志社社員会（理事会）は、できるだけ早期に寄附金を元の寄附者に返却する、と決議した。翌年の公文書（月日不詳）で小崎は堀に、佐伯理一郎（1891年に着任）を校長にするので了解して欲しい、と伝えた。

当時、堀は医師の近藤恒有（1893年に赴任）と共に、病院を実質的に管理する立場にあった。1897年4月に開催された社員会の議事録では、病院の継続を望む3人の医師が、それぞれ条件を出した、とある。児玉、佐伯、それに「現今従事セル医員、堀俊造氏」である。社員会は、佐伯の出した条件を容れて、彼を病院長、看護学校教頭として招くことにした（『同志社談叢』一、162頁）。

5月にいたって、病院管理は佐伯に引き継がれ、堀と近藤の退職が、社員会で決定する。堀と近藤には、慰労金として、それぞれ50円、30円が「贈与」された（同前一、168〜169頁）。

●同志社学園とのつながり

一方、同志社学園の記録であるが、英文の教授会記録（*Doshisha Faculty Records 1879—1895*）は、「堀博士」（Dr. Hori）に関して4箇所（1888年から1891年まで）で、断片的に言及する。プレゼントを贈ったこと（168頁）、10円で雇用したこと（195頁）、夏休み中の校医のサラリーの件（237頁）、欠勤の件（265頁）である。

同志社病院を退職した堀は、京都市内で開業（眼科医か）した。かたわら、教会生活を熱心に送った。所属教会は、不明である。若い時は、京都教会である。1889年の時点で、日曜学校スタッフとして、活躍している（『京都教会百年史』96頁、99頁、日本キリスト教団京都教会、1985年）。後半生は、今出川教会から洛北教会へと変わったのか。

堀俊造夫妻の墓（若王子山・京都市営墓地）

医院は、晩年まで継続された。知事への「醫業異動届」では、1924年3月1日に廃業、とある。が、「目下休業中」（1923年）ともあるので、70数歳で現役から引退したと考えられる。

子どもは11人で、9人が女児であった。子息はともに若くして亡くなったので、遺品は長女（静子）の息子である今井氏が継いだ。堀は二度、結婚している。最初の妻の名前は、不詳である。

堀の墓は、洛東・若王子山の京都市営墓地にある。市内最大のキリスト教墓地である。堀はキリスト教徒として、有終の美を飾るかのように、新島襄の墓がある同志社墓地のすぐ側に埋葬された。

「私程、先生に近づいてゐた者は、他にはありますまい」（『追悼集』二、272頁、同志社社史資料室、1988年）と自負する堀には相応しい。

本井康博（もとい・やすひろ）
1942年　愛知県生まれ（68歳）。
1955年　同志社中学校入学。
1969年　同志社大学大学院経済学研究科修士課程修了。
2004年　神学部教授。日本プロテスタント史。神学博士。「同志社科目」群などを担当。『新島襄を語る』シリーズ全10巻（既刊8巻）を刊行中。